主從心得草五編

下

口 9
1540
10止

門口七9
1.540
10止

主従心得草五編下　目録

人事をつくして天命を待より外ふ安心の道ハあき事　初丁
天ふ事と雖身をおそれめ。死を俟仁の至りとりふ事　二丁
一　死生命在り富貴天ふありとりふ事　四丁
一　社の鼠ハやせ。米蔵の鼠ハ肥ふとる。居所も大事とりふ事　五丁
一　立身出世せんと思ふ人ハ。晝夜怠ぞふ。修行せべき事　六丁
一　君子ハ災ひ来る恐れ。福来ると共。よろこぶぬ事　七丁
一　天子より庶人ふ至る迄。身を脩むるを本とする度　八丁
一　其道を尽して。災難ふ逢ハ業因縁天命の事　九丁
一　主人ハ笑ふもいあるも。家のよく治まる為ふせべき事　十四丁

一何所の主人も。十分ゐあき。家来をそ〜ぐる事　十六丁
一十能六藝あつて。十人前も。九人前も。用ゐ立男の事　十七丁
一初めを伊勢やの前を直通りた事　九一丁
一私が主人ハ無理お人どつとまりませぬとりふ事　九四丁
一主人の非道ゐ[illegible]と。忠義を尽さて出世をする人の事
一伊勢屋吉兵衛ハ。町人の英雄別家五十三軒の事
一主人の御側をつとむる武士心得の事　三十七丁
一佃又右衛門とりふ大剛の武士。大忠逆谷の事　三十八丁

主従心得草五編下

○又主従ハ各別ゐ心得る所もあり。又主従一致ゐ心得る所もあり。一がいゐハ思ふ[illegible]時所ゐよりて[illegible]待あるべし。又家来の者ハ。主を主。家来ハ家来と。急度格ゐ心得べし。主ハ家来を主と思へとりふ事ハ。主君たる者の心得を申も逆ゐ[illegible]て。家来たる者の。決して思ふとゆへあらぢと[illegible]るべし。家来ハ主人の仁不仁ゐかまはぢと。只忠義一途ゐ主用をつとむ[illegible]し。主人の無理非道盲目ゐ[illegible]ぢと。已ゐつゞけつとむべき事を急度つとめて。一生を送る[illegible]し。其心ゐて[illegible]とめゐべ。天道より福徳をあたへ[illegible]ふ

事うさぐひあり。鬼角天ふちくまて居るを。楽しとまべし。何ものどの大智者でも大學者でも天命ふ背きて天より罰しあふ時ハ。是をのがるゝ事ハあらぬがさし。貴賤上下智愚をいはず。ひとしなめふあふとちるべし是ふよつて佛神天命ふそむらぬやうふまべし。福德安心の根本也。一切の福德安心ハ天命ふ隨ふふあらとちるべし

○孟子のいはく。天ふ事へて。而ちて能身を脩めて以て死を俟ハ仁の至り也と又いはく仁義忠信善を楽んで倦ざるハ是天爵也共いへり。一切の人此語をよくちりて人のちるちうぬや。吉凶禍福ふあまるまでと。仁義忠信善をあしと一生を送るべし。是又賢人あり。人のちるちらざるや。吉凶禍福ふ心をうごかさと内ハまごゝ善を楽むといふ場所へハゆきがさし仁義忠信善を行あえて天爵天録を得て。大安楽の田地ふ至るといふ事をちあと云へて。天道を相手ふしと一生を送るべし。天道ふさへそむらぎバ。天地の間ふ恐るゝ者あし。たとひ一旦不慮の災難不仕合ありとも。早速消滅して福德安心の田地ふ至るとうさぐひあし。此故ふ孟子ふ君子ハ決を行ひて以て命を待のことといへり。此心ハ法を行ふとハ理の當然を行ふをいふ君子ハ吉凶禍福ふかまるまでと。善を行ひ已まぐ

米蔵の俵つゝかこ
ふとり社ろの俵ゞ
まへやせおとろへ
ゝ。ありどころも大
事とりゝ圖

あるべき事をなして其余ハ心ゐゆけぎゆうくとなして。一生をくらすとゐふ事也。是即ち其義を行ひて其利を謀らぬといふ場所あり。是を誠の善道といふ。賢人君子の楽とする所ゐして。一切の福徳の涌出る寶藏也

○波奈志之種といふ本ゐ死生在命富貴在天といへ共天命ゐ任せざるべからもよろしこのらに。如何とあるべ人の為所と。居り所ゐよりて不同あり。同し重さのろうそくを同時ゐ燈しこ一ッハ風の吹所ゐ置一ッハ風の吹ぬ所ゐ置て見よ。同し大きさのろうそくども。風の吹所ハ早く消へ風の中らぬ所ハおそく消へる。是居所ゐよりて遅速あり

同し天地の氣を受て生ずる中ゐ何ぞ長短あらんや。然まども土地の肥疲居所の善悪ゐよりて。長短あり栄枯あり。又道端の木の花ハ人ゐ折らるる河の邊りの木ハ風浪ゐ其根をあらひて。中道ゐして。多く枯る者也。又高山の松檜ハ天迫も届くゆうある大木とある又斧鋸の恵ひあし是何故ぞや。其居所を得たるもぞあり。居り所ゐよりて いのちの短ゐいと壽の長いとあり。然まば天命を捨て人事を専らゐまるも不可あり又人事をつとめずして天命ゐ任せたるも猶不可あり。天命人事両つあぐら無て よろしき所あり。孟子の妖壽不貳とゐひ。巖墻の下ゐ不

立とらふ此言至まり尽せり。人の妖の短いも壽の長も天命あるまゝにうとゞひまどゞまぬ。是天命を知るといふ。又巖墻の下ふ立ぎとりふい。くぎをめうたる山の際屏の下ふよらぬやうふまるい。君子危きふ近よらぬと。身の用心をする事あり是い人智を以て災をひをふせぎ。人智を以て災をひをのがまる事をいふ。人事をつとめて福徳安心の素やうふまべし。其上の吉凶禍福い。天命ふ任せるがよしといふ事あり。又米藏の鼠い常ふ米を澤山ふくい。社の鼠いくい物ふ。百里奚い虞ふ愚ふして。秦ふ智あるがゆふらぶ。居所ふよつて。用ひらまるとあり。用ひらまざるとあり。

漢の丰の蓬ぎ思ふてまるべしとあり尤千万此道理ふ。何い鬼もあまま。人事をよくつとめて天命を待より外ふし。ガが第一の心得ふ。此道理をよくまつて万事を行ふべし。中ふも人事をよくつとむるが大入用ふ。天命い人事の善悪ふよつて賞罰ふ。然らば吉凶禍福い此方より造り出ま事ふ。是ふよつて先天命ふ任ままと。人事家業を正直ふよくまつとむべし。現ふ飢寒の大難をのがるゝ事うこゞ人ふ。人々此事を急度心得まへ。狂歌ふ

○ふき物を仕出ま寶ふ手を持て只ふく人ぞあまま成ける

○朝おきハ家を祈させぬ心がけ。暑さ寒さふ身をだいしふあと。何分ふも。人事家業を出情をそつとむべし。家業ふ大骨を折大苦労を致し。夜ふ入しをもとまどとて。朝寝昼寝をもるゆうふ機根ふてと。立身出世ハ出来がたし。役ふ立ぬ人ともるべし。立身出世をせんと思ふ人ハ。晝夜稼ぐふいとまふ働くべし。よい武士よい出家。医者儒者百姓町人ふ至るまて晝夜油断ふく修行もる。人でふくてハよい人ともいひがたし。又武藝學問何藝何事ふあらん。人ふ勝ん人と思ふ人も。晝夜稼ぐふ鍛練もべし。本より上ふ上ふ又各別ふ修行せぬもてハ誠の効ふ致りがた

し。何事ふよくもよく熟せぬ。垢のぬけぬ内ハ名人とハいひがたし。こまふあつて。よくく熟もて垢のぬけたる人とあるべし。人より出世せん。人ふ勝んと思ふ人ハ。晝夜稼ぐふ別段ふ。家業藝能を出精鍛練もべし。何事も不機根不精ふてハ立身出世ハ出来がたし。暑さ寒さをいとはぬふ出精もべし。誉を揚ん事疑ひあ〜

○古語ふいはく。君子の道ハ己もふあるを貴しとす。身の安きを以て富とす。故ふ曰はくふあり。位録を見ても。其心うつらうぬ恵難ふ逢ても其操を変ぜぬ。唯理義の自然ふ順がつてもづらあり。是を真の富貴といふ。又家語一ふ君

子災ひ至る恐まじ。福来まつどもよろこぶべしとあり。此心大入用智ある人い此所ふ心を落付て吉凶禍福をくへうもの。唯一向ふ善をあさべし。終ふい福徳安心の田地ふいるあり。古徳の哥ふ○我こそ常盤の松ふ似たりけり。世のよ〳〵あ〳〵ふ色をかえ福をと。かゆうふ心得たるを君子操といふ。此道理をよくまつて至善ふ止まりて。安心ふ世を送る事〳〵

○大学ふいはく。天子より庶人ふ至るまて。壹ふ是身を脩むるを以て本と為。其本乱まて末治まる者い否ず。其厚くまつる所の者い薄くまて。其薄くまつる所の者い。厚くまつ

と未だこれあらざるとあり。此心い壹つとして一切と同じことなて。貴賤上下押あべてとふ事あり。上ふ八條目を委く説て其中あり。肝要の一ツをあげて。誠意正心格物致知を。皆身を脩むるが為あり。上天子より下庶人のいやしき者ふ至る迄押あべて。皆身を脩むるを以て根本とまつる事也。此故ふ其本乱まて末治るいあらじとふ。家国天下を治むるも身持が根本あり。身をよく治めて家国天下を平治まつるあり。然らば身い本ふして家国天下い末あり。家内い親こを厚くまつる所の者あり。国天下を薄くまつる所の者あり。そこで身をよくあきめ家内の親

ことを厚くして。家をよくしてのへ其上ゐて國と天下の薄くもる所へ推及ぼす事あり。然るゐ肝心の本ともる所の。身ゞ治まらぎるして。其本が乱まって居るゝゝ。家をとゝのへ國を治め天下を平ゝゐもる事ハ。決して出来がたしといふ事あり。是ゐよつて先身をよく治め親ゐ孝行を尽し。兄をうやまひ弟をあはれまして。家内の者〻親ことを厚くして。家をとゝのへ夫ゝゝ一家一門と和合して。國天下を治むるあり。ゝるゐ身を脩めぎ親子兄弟一家門を薄くして。不和あらぎ薄くもる所の國天下ハ弥〻薄くあつて。治むることハ決して出来がたしとあり。

然らハ身を脩むるハ根本ゐして。家國天下を治むる事ハ末あり。此故ゐ上天子より下万民の賤き者ゐ至るまで。壹あしあへて身おさむるを以て本とまして仰せらるたり。其本が乱まって居てハ。末の治まる道理ハあき筈あり。上天子より下万民ゐ至る迄。身をおさむるが善事の根本ゐして。諸道成就の所あり。若身をおさめぎるしてハ。家も國も天下も治まりがたし。身をおさむるハ根本ゐして。其外ハ皆枝葉あり。何でもあぎても。身をよくおさむるを第一とまべし。是を本を治るといふ。是を本をつとむるといふ。福德安心を願ふぎして来るべし。若身を治めぎして。國家を失ひ先

祖の大功を空しくし致し。妻子眷屬を路頭ふ迷はせ大難義をめけるる事。悪事の中の大悪事あり。何卒一切善根の根本たる身をよくあきめ。妻子けんぞくを安楽ふやたふふべし。是ぞ目出度人とりふべし

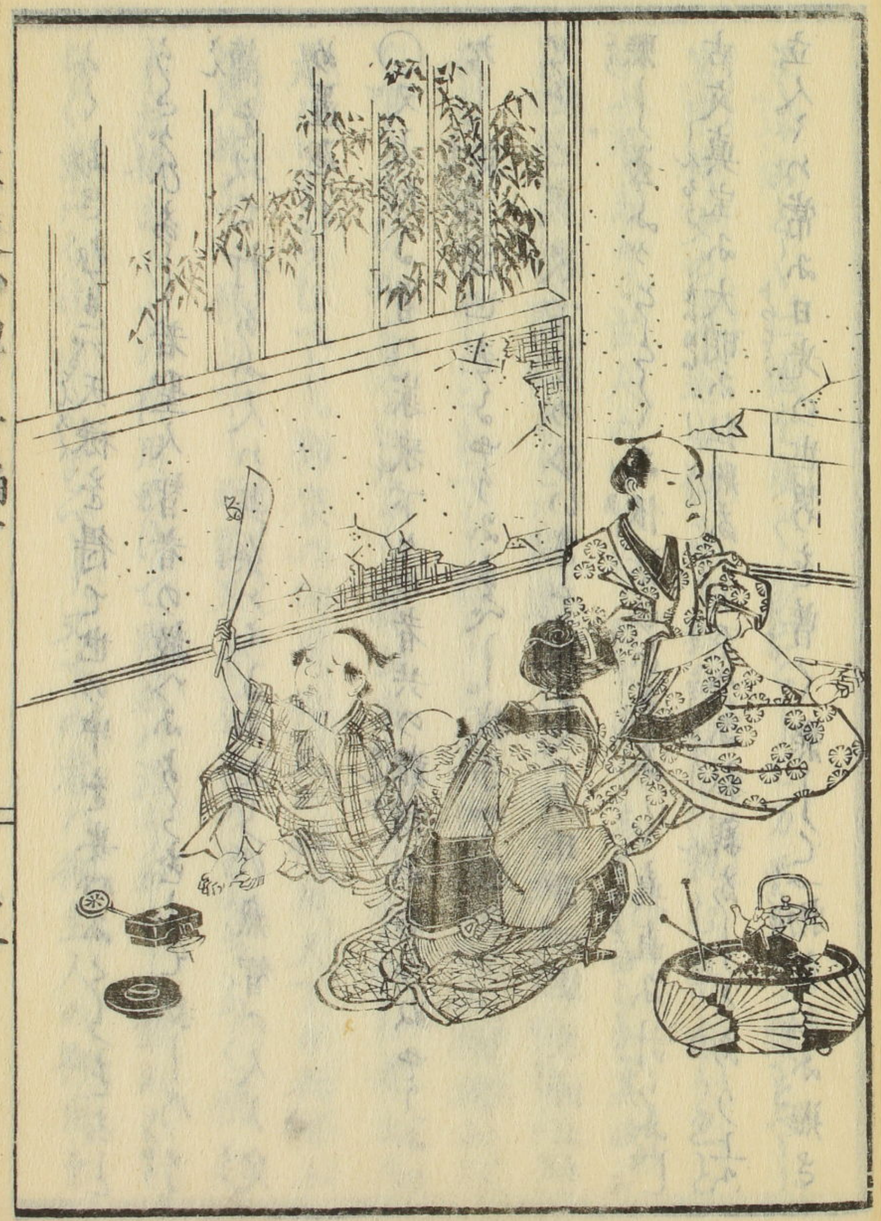
○孟子ふいはく其道を盡して死する者ハ正命也と註ふ其道を尽もこへ。身をよくあきむる事あり。身をよくあきめ道を尽したる上ハ。災難ふあふて。死するとも正命あり。身をあきめもたて災難ふあふて死もふたる邪命あり。又孟子ふいはく君子の守りハ其身を脩めて天下平ゥありと。註ふ君子の守る所ハ身をあきむる

を以て要とも。よく其身をあきむる時ハ家よく齊ひ國よく治まりて天下平ゥあり。わどもを所順ふもこ及ぶ所あきりあり。是守る處約ふして。わどもを處ひろきあり。身をよくあきむる時ハ。万事よくとのひあり天下迫平ゥふあるあり然らバ身をあきむるハ。一切善事の根本あり此故ふ人々先身をよくあきめて。一切善事乃本をつとむべし。福德安心ハ願もおもして澤山ふ来るべし此故ふ上天子より下万民ふ至る迄身をあきむるを以て本とも。とのふべり。ありがたきをしへあり慎んで拜受もべし。哥ふ○まもるとハ身をまもるのがまもるあり。

身をまもらゞれば神もまもらぬと是ハ間違ひあし。心ハ何ぞど清淨善心でも身を守り慎ゝまざるハ於てハ禍ひ即座ハ来つて罪科をのがゝれがたし。此時ハ至つて神も守り給ハぬ是非共ハ身ハ亡ぶ爲し。人々この事をよく〳〵ゝつて。急度身をあらためゝへ。福德の来る大道ハ繫

○論語ハも其身正ゝく〳〵して。天下平らぬとあり。是ハ相違あし。四書五經其外の未書等ハ至る迄。皆是身をハさむるの一ツを說たる者あり。慎こゝろをまもりて身をよくおさめ。天爵天祿を得ゝふべし。世間の放蕩者共此儀を

深くゝつて。是より心を取直し身をよくおさめ。家業を出精いたし家をこしらへ。世の中を安心ハくらべし。是を誠の樂ゝとしハ。大酒女郎買狂山おどりを樂らゝと思ふハ。狂乱の甚しきあり智者の眼より見る時ハ身をそろゝし。家を失ふの道あるゝ。大苦ゝの最上ハ。大ひハ恐るゝ事あり。然るを樂らゝと思ふハ馬鹿の嶺平狐付の大將あり。此上の狂乱ハあるゝ爲ゝ。此事をよくゝつて。正氣ハあるべし。何でも大聖孔子孟子の教へハゝゝゝ。四書五經ハよりと行ふゝ爲し又家業ハひまあき者ハよき心學のもハ本を見て心をあらためゝ身をよく脩むべし身を



十人も廿人前もたべらきのたるをとこの圖

ふくあきむまへ。天禄を得て世の中を安心ふくらもまと
うさぐひあり。若聖人智者の教へふくらもし。私しの猶
簡を以て行ふ人い其余いらるふたらば無智の人と定
め置べし

○又上たる者い。家来下々の者共の難儀ふあらぬゆうふい
たし。追て出世もるゆうふまべし。我子や孫のひいきをうり
せもと。家来下てのひいきを致まべし。日月の草木国土を
照しふふがごとくふ。依怙ひいきあく真直ふ計らふじ
古文真宝ふ大明ふ私照ふし。至公ふ私親ふしとあり。上い
立人くい常ふ日光の世界を普く照して一物も私ふ照さ

ざるがおとく。仁徳を廣くわどとして。万民を守護まべし。
宮中侍女の輩迄も。假ふも私ふ愛し親む事ふらもと
いふ事ふり古人のいろく。形ち直くまて影曲らぬ。其政ど
と正ふりして。國乱ぬとい間違ふし。天下万民ふ依怙ひいき
ふく。仁徳をわどとまべし。然りとしん共下々い不機根ふ
て。唯うまひ物をくいたがり捷ぶ事ばかりを好む者ふり。
是いいまもむべし。御家の御用。御国の御用。天下の御用ふ
い用捨ふく使ふべし。雨雪寒暑昼夜のもうちふく。使ふ
し。左様ふくとい御用ふけて國家い治りがたし。勤めてと
らく事いもげしくまべし。又下の者い御主人の御用を

よくつとむべし。生皮不氣根なれば。相濟不申候主人の為
ゆゑ〻〻くと思ふ大間違ひ。ぶ飯をくふ為のもと
らきあり。是より依て御主人の御用を晝夜つとむべし。
終ゆへ出世まべし。生皮者ハ人の邪广まぐれて。大きふと
ろし終ゆへ貪之あんぎもるあり。是天の御定め也。是ゆ
へつと出精して。主人の御用をつとむべし。もんぞうぼくい
人でなくてハ福德なし。柔和ゆして。上の者ゆよくもてな
ふ人でなくてハ。よい人とハいひがたし。孟子も堯舜の道
ハ。孝悌而已と仰せられたり。是上ゆよくもてなふ
ぜ。善良の人とハいひがたし

又主人たる者ハ家のよく治まる事を樂とせ
しいらるも笑ふも家の為ゆまべし。我身の得手勝手ゆ怒
りたり笑ふたりまべうべ。只家の為ゆある事を第一と
まべし。手代小者ゆ至る迄。ろくゆやり川ハ一人もなし。ろ
くゆやりハあけまども。夫をはとまるやうゆして。はとゆ
させるゆ主人の慈悲あり。いづを人ゆあるやうゆ使ふべ
し。末ハ店持家持とあるやうゆ致まべし。越度あらば。も
うり又ハ異見をして。押直しく使ふべし其人を追出
して。外の人を使ふ共。又同じく役ゆ立まゆ先と元
の人を使ふ方ゆ勝ゆあると考へて。堪忍して使ふべし

又よい家来ハ沢山ふあるといふ物の。よい家来のあいもとある。何もの主人方も此一段ゆハ當惑ふあふ難儀と云べー

○家語ふ孔子のいもく。人の一善を見て百非を忘もく。人の善あるを見て己もとあるがごとし。人の善を軍とハ自ゆ是を行ふ。而して後ふ人を導くとあり。

万事この心持ありたし。此そろ持ゆき人ハ上々乃人といひがたし。是舊惡を捨て新功をとるの心なり。

又旧悪を思ふて。新功を捨る人ハせまくして仁心ふし。人の功を押へて人の悪をあらはすといふものあり其人の下ゆハ前非を悔て功を立る人ふし。是人をそこなふと

いふ者あり。併し旧善旧悪も勘がへて賞罰もる事もあるべし。是もあくと叶ハぬ事あり。先ゆ不忠不義の罪あらば。後の大善の賞ハ火くハ扣へてもよろしゆかるん。又先ゆ忠義善行あらば後の大悪の罪ハ減少もる事もあるべし。そこハ臨機應変時所のよろちきふちとがふべし。旧善旧悪を考へて賞罰せ称ばあらぬ事あり。然もども旧悪を遺根ふ思ひ人をそこなふとハ大悪無慈悲あり。是信長公の天下を失ひふあんあり。いづもめしても主人ハ。家来共の火くの不義不忠を一々咎むべらぬ。又家来の不肖難癖をあるのりいふ者らぬ。其様ふ吟味もるゆ。世界中ふ

使ふ人あり。大体の事ハ宥免して使ふべし。あまりこせくと
せんさくまるハ。苛政ゆゑ國家を亡さこんもあり。
主人ハ家来共の不義不忠。不骨難癖を。あまり一く咎む
べからぶとゆふ事を。よろとするべし主人ハ敬寛信敏惠の。
をこゝろあひありたし
○人ハ只失を糺さぶ德をたゝ。苦いぶこゝろもとへあるあり
○あゝきとて只一筋ゆ捨るあゝ。たぶうきを見よ。あゝ乾とある
○賢人も越度失義ハありときく。人のあやまち。笑ふべからぶ
○誰身ゆも七ッのくせハありときく。幾度も身をふへりらるべし
是等の歌をよゝ考へて。誰身ゆもあやまちある事を悟

るべし。人のあんくせを一く咎むべからぶ然るゆ何所の主人
も。十分ゆよき人ぞなり。ゆゝ。先筆筆ゲ達者で得意
先の應對をよゝして。商ひする事ゲ上手で。万事利根で
何をなすもよく致し。其上實体で。主人の髪月代もよく
致し。其外小料理等もよゝこゝらへ。又折くハ米もつき。槇
もする。そなて無病で達者で御飯ハ火々たべて。よくもこゝら
く奉公人ゲ抱へたいといふ。主人ぞなりあり。右之通りの
十分ゆよい人ハ。大千世界を黄金の草鞋で。尋ても一人も
あゝ。極上のよいといふ所ゲ一得一失の人あり。其次ハ皆く
いつぶゝの。何の用ゆも立ぬ人ぞなり也。見世のゆぞなりもの。

ぞくの房も同じ事也。一切の主人達。其心得ゐて下人を使ふべし。

○又万能ありて。一心たらぬ人も役ふ立ぬ者也。ある所ふ何をさせても十人前も。九人前もする。よい男あり。よくあき筆用ハ勿論。立花蹴鞠歌俳諧何をさせても上手也。又細工事ハ人のまねる事を一寸見ても。やる物也。直ゐ上手ゐ造る。又口をきかせハ殿方の前ぐも。巧こむと云事一向あし。何をさせても。何所へ出しても。一騎當千の男。百万石ゞ物ハ。どふしても。ある男あり。其位ゐ利根發明者ゐ共。鬼角身上持がりてるくて。妻子を養ふ事ゞ出

来ぬ。女房子供ゐハいろでも。きてもあい物をきせ。あゝゐい物をくもせてあくあり。女房のたてらきで。今日ゐ漸くとちのぎゐ稼る。此上の貧乏いあるべからぬ。或人問ていはく。貴様ゐどゐ智恵才覚を以て。妻子を養ひ給ふ其ゆゑゐびんぼうもするハ。いろあるいもありやとゝ。ゐの男答へていはく。私ハ自まんでハあけも共。よく書筆用ハ勿論其外の藝能も人より上手ゐもてるあり。十能六藝何一つとして。よくぜとゝふことあり。然もどてもするい事ゐハ生ぬ付て。唯ぬらりくらりと撞んで居ること好あり。手も相應ゐゐけども。筆取る事ゞきつい嫌

ひ。箕用も相應ふやるけれども。箕盤を九年も手ふ取たる事ふ〜。其外の藝能も皆打捨て。旋んでだらり居て手を出も事もいやあり。又朝寝ゞもきで。晝の四ツふあら稱べ起こる事ふ〜。夜いつ迄も起て居て。酒をのこ蕎麥をくい。人寄をもて。さらもぐ事ゞもきあり。其くせ油火がきついきらひで。ろうそくぞうりをもも〜。三度の食餌も。少菜ゞあけもばくへぶ。よい物ゞ着たし。うまい物いくいたし。第一酒ゞ大好で。毎日〜あびるうどのこ。其くせ跡引上戸で。管をまく〜事ゞもきで。人のいひゞる事ゞあもふろくてふらぬ。又銭金を見ると。人の物たゞの。我物たゞのと

いふ差別ふ〜。皆遣ひ〜くして。ちまもち稱べ。氣のまもまふい性分で。何でもかでも金銭のある内ハ。ぶつをもつて居てのんで居る。酒ゞあ〜あもバ。直ふ旋山ふ出うける。この人ふつき合。きぐんを取もべ。出世もるといふ人ふハ法きい合事ゞきついきらひ。其くせ銭ふもあらぬ事ふハ。世話ぞきで。段〜と損をもる。又もるい事ふも文といふと。一ぞんゞけふのろくあり。よぐを八尺たらして。前後をもまもる。うてう天とありて。人目も耻も思もぬあり。又ふさき者で。見へもる事ゞもきで。氣の法もる事ハ。きついきらいの人のいふをを少しも聞ぞ。自分の思ふ通りふ

せ給へ。虫が得心せぬ。かゆうか我慢ものあるべ。人も憎うて
かまもなど。出世も家業も出来まぜぬ。夫故か貧乏致も
といへど。ある人聞て。あるるなど何かうしたけて。如在なく
功者で器明な人だと。いはまる手合か金銭のある者
か一人もなし。皂角外の事か利根でも。身上持か利根か
なくて。何あるもあらぬ。人中で口利事も出来ぜ。何の
役かも立ぬ。川ぶちといはまても。身をよくあらうか
家業を出精て。金溜るや川が一ちん利根なり。金さ
へあるとあのづくり
御公儀の御法度も肖あぬ御先祖の法事等もよく致

し。親孝行も家内和合も。御家もちんかゆうして。かうだも
達者で長生もるといふ者あり。おまへは惜い事ぢや。一器
量ある者あるべ。是より心を取直し。一持ぎめせいで。う孫
持かあり妻子けんぞくをよくやしあひあへといへば。金
ぞもき物だ。先もきな事をして。撰んで居るがよいといい
へど。夫では貧乏もる筈あり。利根といひまさし大馬
鹿あり。無藝よりい大ひかあるといましめたり。金
もやしけまば。出来る手もあり。智恵もあり。貧
乏もるハ口惜き事あり。是等ハ好んで貧乏あんぎもる
人あり。万能より一心万藝より一職か相違あし。万事か

主人炎四帝丁維ふ水を付べんもくませる圖

役ゐ立ぢ共家業の一ッさへよけさへあらば。万能ある人ハ多くハ我儘ゐして。身上の事。妻子をやしあふ事ゐハ。一向ゐ役ゐ立ぬ者あり。然らば藝ハあく共。ゐぶく共。身を能おさめ。家業を出精して。家をとゝのへ家来けんぞくをよく〳〵やしあふハ大上々吉の人あり。ゐのまり万能ありて。何ゐもあるも能用ゐ立といふ人をしめる為ゝらば。何ゐをゐゐも用ゐ立といふ人ハ藝ゐ優り。智恵ゐゐとり。山事をいとし。まるだくをして。家を失ひ身を亡ぼ〳〵一家一門家来眷属迄ゐ。あんぎをゐける者あり。右様の人ハ世間ゐ。らくらもあるものあり。

然らば何ゐもゐゐも。用ゐ立といふ人をあまりあるしめゝへゝらば。唯正直ゐ家業を出精する人を好むべし。大千世界を尋ても。十分ゐよきに人ハ一人もあきらもるべし。一切の主人たる者ハ此儀をよく心得玉へ。万能ゐあつても一心ゐ定まらば。取ちまりあき人ハ。万能も徒らとも也。又万藝ゐあつても。家業の一ッゐよくあくてハ。家を齊へ妻子けんぞくを養ふ事ゐ出来ゐとし。此故ゐ無智徒藝よりハ大ひゐおしるゐあり。幼少より手習学文諸藝を習ふハ。何の為ぢや。畢竟家を齊へ妻子けんぞくをよく養ふ為也。ゐるゐ妻子けんぞくをやしあふと

が出来ぬとあれども無智無能より大ひにおとるとなる
べし。是ハ自ら咄しあり。川柳が發句に○初がつを伊勢やの
主人をもぐ通り。是ハ家業を一途につとめて身上をよく
する人也。初がつをハ扨置細魚。いろ〳〵もめいたふめるもの
書くばかりにて御飯をたべるといふ人あり。其ありさま
金銀ハ年々段々と殖も人あり。○二代目のいせやよびこむ初
がつを。是ハ少くおごりの心が出来て。少く家業をよそふ
見て立花をいくらもいけを致し。初がつをも買ゆうみあつ
たるとて。何うと物入も多くなりて。金銀ハのびがたしとなる人
なり〳〵賣居をかうでめ〳〵三代目。是ハ大おごりとなつ

て来て。立花をいくらもいけ勿論謡ひ舞茶の湯等を。上手に
なれ。万藝ハよけれども。肝心の家業の一ッがおろそかなる故に身
上が甚だ衰るくあれて。家来けんそくを養ふことが出
来ぬ。此故に先祖の丹誠にて土藏作りに成たるよいいへ
を。賣居に出し。分散して在郷へ引こ。又ハ裏店へ引込んで
後にハ紙くずを買。かうあさの古骨買にもあるなり外に
手段あり。いろ〳〵至極とりふべし是によりて万能あり
家業をよくつとめて。家を齊へ妻子をんぞくをよく
養ふべし。其上にて。餘力あらバ。人の藝を上手になるを
見て。楽うとまべし。まこと藝ハ藝者にあるに及ばず藝

者ゐあるべし。必ず身上の障りとある。身上の障りとある時ハ○藝が身を助くるゆゑどの不仕合とある。是ゐよりて。家業を出精して。妻子けんぞくをよく養ふゆゑどよき事をあきとゝるべし。妻子けんぞくをよく養ふ内ゐ礼儀も福徳も安心も。一切の楽ゝハ皆其中ゐありとゝるべし。何ゆゑどよい藝能ゆあつても妻子けんぞくをいたゐふゆゑ大馬鹿大恥也。誠の楽ゝとゝりふハ。妻子けんぞくをよく養ひ。家内和合して暮すを世界第一楽ゝとも。是を身分相應ゐ養ふゆゑハ國家もよく治まるゝ。福徳も安心もあゝ人々此儀をよく弁へ家業の一道を出精して家を齊へ妻子けんぞくをよく養ふべし。芝居角力物見遊興も。よく養ひたる上の事也。歌ゐ書ゐの道を第一よくゝとゝるべし。若身上ゆ不如意も角ゐもと此心をよくゝとゝるべし。其外ハ兎角とゐ川ゆゝる時ハ。飢寒の大敵ゐせめられて。命ちあやうし。其時ゐハ親子離散ゝて。奉公ゐ出るゝ。又ハ乞食ゐなるより外ゐ。此上の大恥ハあるべからず。此儀を能く考へて不覺ゐあきゆゝゐまべし。多度ゐ出る人

○名誉ゐ心ゝ。人一長あゝざる事ゐ。又一短あゝざる事ゐ。若一長を取らゝ。一短ゐあき者を求めて。天

下ふ完き人あり。苟も一長を取て。其余を忘るゝ時ハ。蒭蕘の言といへども猶取べき者あり。況や名ある者をや。其失あるを以て。其失なき者を拜せて是を廢せん事ハ。まどいあり。苟もゝ心を平らふして。短を去り長を取る時ハ。其益たる事大ひありと。法華經提婆品の註ふ。鐘と抑くを以て鳴。刀ハ磨くを以て利し。金ハ煉を以て精し。梅ハ寒を以て香ぐし。但し其益を取る其非を計らず。子ハ乳をたゝくたゝく母の醜きをそしらず。人のくゞ物を取るふ。技のまがりたるをきらハざるがごとしと云へり。是人の非を捨て功を取るふたらふ。其よきを取り

其あしきを捨置べし

閑路の提挑燈ふいもくく。私ゝ主人ハ。無理ふ人でつとまりまぜぬ故ふ。いとまを取ろふと思ひまもゝ。堪忍の修行で。主人の無理が直りまぜうゝ。答ていもくく。とふたの主人ハどのやうふ無理をいもをまもゝたりまぜぬが。夫でも食事もあるへぢ。夜も寢させぢ。冬のさむいふも。たゞごゝろでおき。夏も蚊帳をつりぢふ。蚊ふくもせておきまもゝ。左様ふ事ハどゞるまい。若左様あらば。外の奉公人もつとまらぬもへふ。家来ハ一人もあい筈でゞる。主人を無理と思ひたゝゆる。とふくの無理を先へ直さつたゝゆる。

一こゝろざし不忠なゆへに。主人を無理と思ふこゝろ。こゝろ〳〵の不忠なるゆへとゞこゝろ。我主人ハ無理なる人なやあど。身共に向ていふゆへなるあらゝして。主人のあやまりをあるくのごゝろ。是不忠なるゆへとあり。若主人ハ無理なるあゝ。家来の役なやあせりこめさつゆへぬ。君のあゝきをいさめざるハ。禄ぬを人なゆと。古人もいふまゝ。奉公に出た日より。其一身ハ主人の物ごゝろあゝて。いろゆふ無理も苦労もかへり見ぜふつとめ様なあらぬ事あり。是を常ふゆへぜ。かりあも私しの心あゝ。主人の御用をよゝつゝめて。此身ハ主人のもの

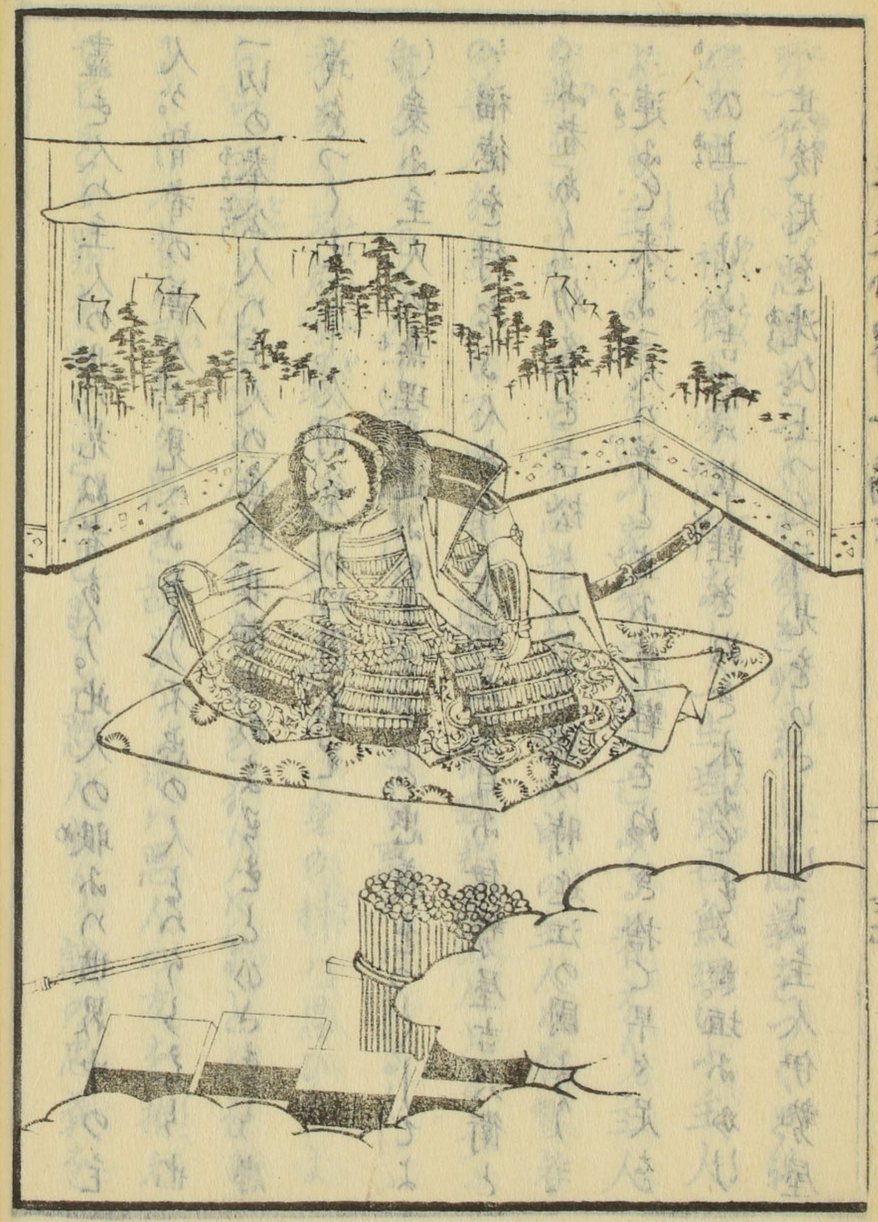
なゆへ。氣低我儘なハあらぬ者とゆて。平常忠信をむ様なゆて。つとめまゆると。どのやうな無理な主人でも。其志〳〵ふ恥て。無理も直らゆやありませぬ。とあさふぎらゆ。其家ふ久しゝつとめ。ちゝま羽織をきて主人のあるりふもあるやうふ。ありまゆと直ふ慢心を起し。此内ないおまゝぶあら様ゞ用ゞたりぬ。身上ゞ立ゆりぬ抜と思ふらゆて。主人のいひ付も用ひぜ。氣低ふ万事取計ろふ故ゝ。終ふハ主人ふ見ちなさゆ。其家を追出さゆ。年来の旧功も水のあゆとあり。甚だあんぎゆこと人をあまゝと見まゝ。功ふゆとる時ハ其功をうゝあひ。大きふ福徳を落ゆと

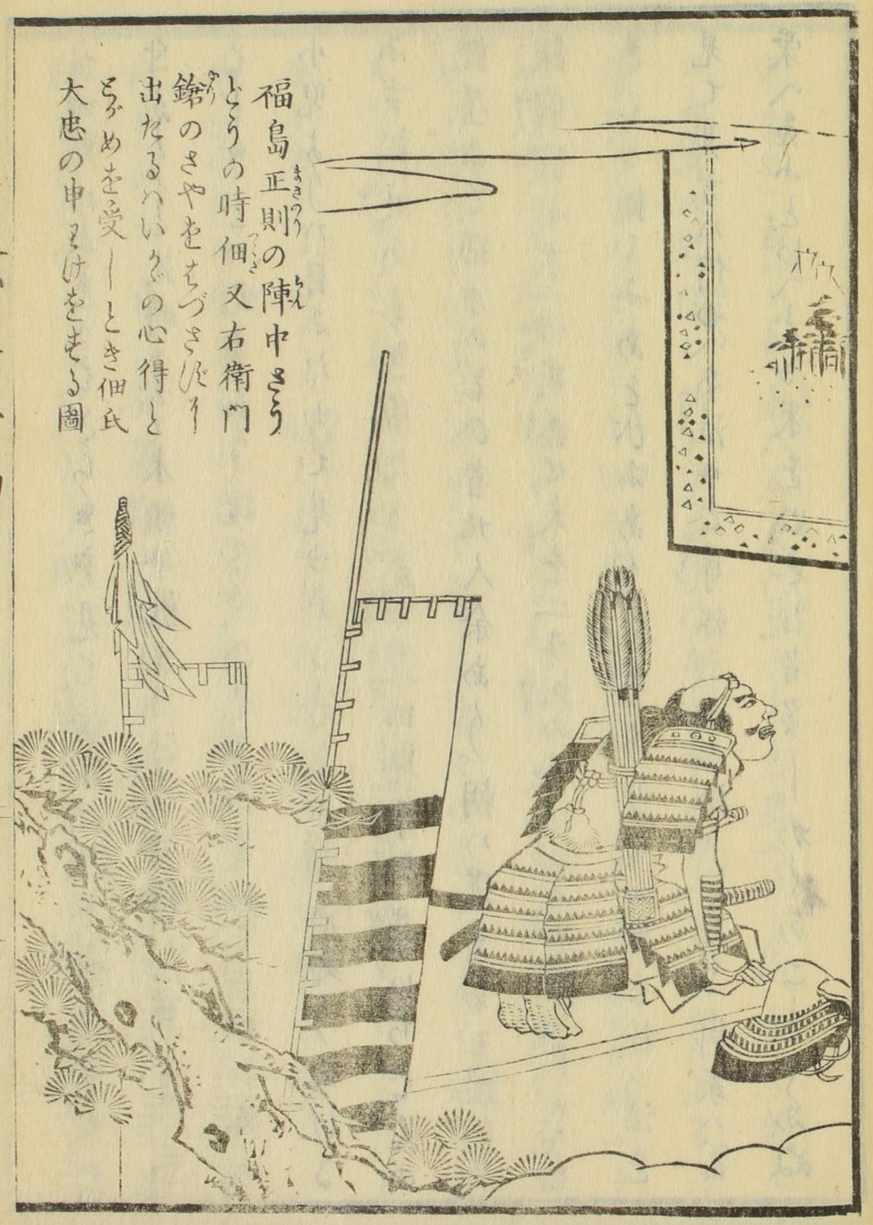
あり。其家来ゞあくても。其家ハ隨分と立汎ふ立まゝ家。見かぎらまて〻家来の身ハ立ゞて〻。かゆう為事をちらぎ〻て。此内でハあゝが居らゝ称ゞ。用ゞたりぬ身上ゞ立ゆうぬと思ふい。大ひあるうろたへ者あり。是といふも人の人たる道をちうぬ故でゞざる。こあゝの主人ハいと海を出まゝ心もあく。何卒身をよく〻あきめて。末々を家持ゆもあるゆりふと思ひ。氣ふいらぬ事もいひまゝ。さまゝゞ主人ハ真實でゞぎゞども。こあゝさゞ大不実でつとめふくい故ふ。いとまをちろふと。いゝちゆるハ大ひあるあやまりあり。其あやまりを改めて真実ふつとめさつちゆゝ。親への孝行主人への忠義其身の仕合此上ハあるべくもゝ。狂哥をよくまゝ。くふうゝ川ちゆゝ○捨て行主より先へあのゞ身の。もくるをちらぬ。人ハだろう者と此道理ふ相違あり。一切の家来たる者ハ。主人の是非善悪をうへりゝ。只ひゝまちう忠義をつくして。其余をもゝまゝたるゞ如くふまゝべし。左まゝゞ福徳ハ十分も九分も来るべし。其ちゆうこあり。次下ふてよくちるゝ。所詮主人の無理非道を見て。彼是といふゆ川ハ。不忠不義者あり。主人ゞ無理いふうらして。忠義ハつくせぬといふあり。世界中の主人ハ大方無理りふ人あり。然らハ何

所へ行ても。忠義をつくさぬ者あり。忠義をつくさぬ所へ行ても。忠義をつくさぬ所あり。一生埋没也。無理りふ主人べ出世も福徳も来る期あり。主人の非をいふ家来ハ先へ亡ぶる者あり。主人よりも。主人の非をいふ者ハ。必ず不忠者あり世の中の主人ハ。皆智者の善人あるとても。不忠者の眼ハ無理非道の人と見へる者あり。主人ハ十分ふよい人あるとても悪しいもるくいふ者あり。不忠不義のくせあり。歌ふ〇身の科ハ。思ひもよらぬ。主親を。そもる人とて。あるもありなる。と人をもるくいふ者ハ。己れが悪き故あり。是ハ悪人の友を拵へて。己れが罪をかくさんとする悪人あり。誠の忠義を

盡す人ハ。主人の非ハ見ぬ者あり。此人の眼ハ世界中の主人が。智者の善人と見へるあり。不忠の人とハうらもれ一切の奉公人ハ主人の無理非道ハ。あまりもとひさもら忠義をつくすべし。人間第一の心得あり

爰ふ主人の無理非道ハ。あまりもと。忠義をつくしてよ福徳を得たる人あり。本郷五丁目ハ伊勢屋吉兵衛とふ者あり。幼名を吉松といふ。十一歳の時近江の國より三連ゆて来る。二人ハ兄と直ふ草鞋をぬぎ捨て早々足をひ上りける。吉松ハ草鞋をぬぎ水ハてもつぎ。垣ハかけ其後足を洗ひ。上つて日見をいさしける。主人伊勢屋





福島正則の陣中さう
とうの時佃又右衛門
錦のさやをさづさげて
出たるハいぐの心得と
ほめを受しとき佃氏
大忠の申さけをさる圖

彦四郎はあまどぐちらきを見て。後ふハ物ふあるべき生き付ありと此時より末頼母敷思ひける。楠檀ハ二葉より香ぐ〳〵きとハ此事あり。扨召使ひ見るふ其つとめかさ外の小児よりハ。目ふたちて見ゆ。ある時彦四郎庭廻りをけるふ。吉松庭ふあき居たる。是ハ彦四郎本郷墓。いちたんの糀屋ふて。糀方の若ひ者九人余あり。朝ハ糀をあきあひ夕飯前後ふ。米一臼宛養せ。夫を二斗入の半切ふ入させて。夫より已きくゞ様くふあそびふありく事あり。彦四郎吉松ゞ泣を見て。其方ハ何ゆへふ泣ゆと尋給ふ吉松ゞいもく御家ハ富栄へゆふといへども米を如ものむ者多し。かくのごとくふぬ

もまゆをあるゝ。身上ハ今ふ亡ぶべしと思へば。くふ志く候いふ。彦四郎聞て。何ゞ志ゆうこありゆとふ。吉松ゞいふて。皆米つき志まいて。半切の中へいをあく。ひとくふ米の中へ大の字をあきあきたゆ〳〵見るふ。朝ハ大の字過半あくあり。大の字の其低あるハ至て少し。是人の手をいをて。盗ミ取りし志ゆうこありとふ。彦四郎も器量ある者ゆをば。大ひふ志ゆう。火くの盗人ありとて。何ゞ其様ふ衰むをなりん。やゝゞをの家ふも小盗人ハある者あり。俵〳〵汝ふ米奉行を申〳〵付る間。隨分と盗まをぬゆうふをべしと。米奉行をいひ付たり。夫より段くと成人志るふ隨て。あきあひ

も九人の者共よりもよくりこーける。外の者共ハ一朝ふ百五十文宛。もふけりるふ。吉松ハ三百五十文宛りふけりる。是ハいろある事うゝいふふ。朝七ツふ起て糊を一荷持出芝辺へ行て賣拂ひ。此利貳百文扱帰りて。又神田辺へうりふあき。人並ふ百五十文宛儲ける。主人の徳用いくぢくゝ志ぢぐさ一。疾四郎の所の福の神あり。疾四郎も吉松ゲつとめふたを感ゞ ける。吉松十八歳の時心底をくろうんと思ひ。ある時。外の者ども。あちく帰りけるふ。朝飯も賣せぞふ水一荷汲来ると。此水ハ御茶の水火消屋敷の下ハ堀端ふある井戸也 此井戸ハ。享保十三年九月朝月。大水の節。御堀ふ。今ハあとも一

本郷　五

丁目より汲ふ来る。一荷汲で帰ると。次手ふ今一荷汲来ると申ぢ。吉松思ふ。ぢうハ外の者共ハ。皆く先へめへり。朝飯ふ食べ。ちゝぢを呑て居るふ其者どもふハ申一付ぢ一て。ぢぢ一ふ申一付るハいろある人の使ひやうやと思ひけぢども。又一荷汲来る。迎りの事ふ。今一荷汲来ぢといふ。そこで吉松大ひふうゝ。是ハ我を責ぢろさんとの仕方あり。是非もあ一今日只今迎の命ありと思ひ定め。小石をひろいたもとふいぢて。入水ぜんと思ひ一ぶ。いやく まぢ一ぢ。ぢうぜいのぢんぢんふて。かやうおうきめふ。めぢんもちありゞゝ一。然ぢバ水を汲てうへり。其後いろやうとも あるべ一と思

ひ直し。水を汲て帰りけるべ。彦四郎殊の外よろこび。下女共ふいひ付て。足をあらはせ髪へきさるべしとて。彦四郎が前へよびよせ。衣賞を着くへさせ。紬の小袖一重帯等もよきを結ばせて。其方嘸ひもじかるべし。我も其方を待て朝飯もたべずに居たとて。鯛のやき物拵の料理あて。相伴申し付。たべ終りて九人の糀方若ひ者共を呼よせ。彦四郎申し渡しけるハ。今日より吉松事吉兵衛と改名致し。糀方の番頭を申し付るあり。不足ふ存ぜる者ハ。いとまを取りて出ぜ申し。又吉兵衛儀ハ九人の者共ハ。心次第ふいるもべし。心ふ叶ぬる者あらば。我等ふ聞ふ及ぬ事ふ

ものをつくるを申し。万事其方が心任せたるべしと申し付たり。是則ち吉兵衛ハ主人の無理ふあるまじとよく働らき。堪忍つよきよりあるる幸ひを得たり。扨吉兵衛ハ三十の歳迄糀方の番頭をつとめ。後ふハ商ひ番頭も兼て。つとめけるが又次の者の障りあるべしと。思ひ宿這入の願ひを出しけるに。早速ふいとまを下さる。久しくつとめたりとて。金三両くるしこうり。九年余もつとめたるゆ。余三両ぐらいくるたらば。彦四郎がつらへぶ川つけて取られる者多し。是ハどふふあつても取りがたし。然るふ吉兵衛ハ左様ふ事ハせぬ。堪忍つよい男也。ありがたく存ず

まをとりふて。是をてうだいいたし。夫より同町親分乃天野屋長左衛門とりふ。年寄の方へゆき。私儀も彦四郎かさを首尾能つとめ。いとまをもらい申ゆ。只今迄ハ大きふ御世話ふ相あり。ありがたく存じ奉り御礼ふまいりゆとりへて。長左衛門聞て先ハ目出たし。彦四郎ハ何ぞくれたるうと問へて。金三両くれ申しゆとりへて。そをたあんまり少し。あぜ三両ぐらいもらつてきたぞ。彦四郎がつらへ。ぶつけて取られバよいあとりへて。いへ〳〵御主人の事あるまで。左様ふハあらずがたし。何でも思召次第少しもらたくとふ思ひ不申ゆとりへて。夫あとりへ何でも九年余も首尾能勤めたるふ。ぜめて十両ハよとあて裏店で也借て。出商ひでもする様ふ。仕そふふ者をゆとりひろをバ。吉兵衛申ス様ハ。此方ふも役ふ立ぬ所あつて。十分の内用ハ勤まりがたし。夫故の事あるべし。何でもあぜも御主人の思召次第とりふて。少しも恨む心なし。長左衛門申るハ我等も何ぞ遣べしとて。財布を取出し。是ハ多ぶ家ふて駄しく金子の入たる財布あり。是を遣ハ間。随分と金をもふけて。末ハ繁昌もべしとて。金壹分ハ多くて遣ハ。吉兵衛ハあぜ〳〵けあき由申して。都合三両壹分の金子を紙ふて幾重も包て彼財布ふ入て帰る。扨吉兵衛

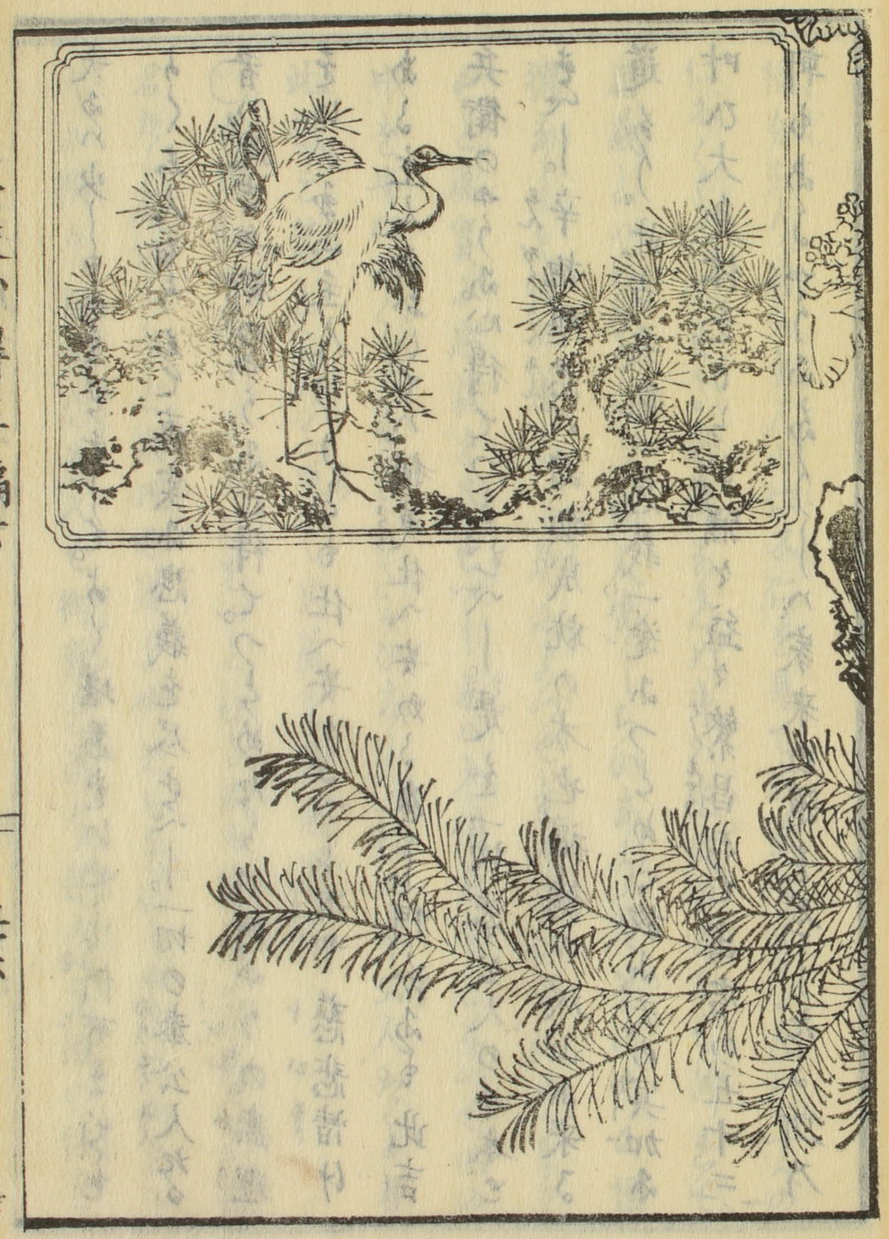
は彦四郎居宅のむかふに。九尺二間の明店をかりて。割こたぐこをうりて一人くらしぬ。其内ゐも折節は彦四郎の機嫌をうかゞひける。隨分とあきあひ上手あるべ。人より余計ふもうけける。扨二ヶ年もまぎて。彦四郎吉兵衛を呼で申しけるやうは。其方も今の通りあてハ相濟まじ。我家のおらびふよき屋敷を求め。見世を出もゞしと思ふなり。其方まいりて番頭をつとむべしとのふふ。吉兵衛並々の者あらべ。此年あまりもつとめたるふ。基手金もくるべ。むごき正へあり。何とて番頭をつとむべきや。然るに吉兵衛申もゆゝハ。いつさま一人くらしあてハ。甚ご不自由ふまべまいる。色きとして借屋をもまハ。彦四郎の出見世へ引うつりける。金五百両の家屋敷。金千両のあきあひ仕込こ。外ふ元手金として五百両。都合二千両是を其方ふ任せ間。よくくあがぎて年々ふへるやうふもべし。勘定ハ我ふ見もべし。又妻もあくとあるまじとて。相應のところより妻を迎へける。扨盆暮ゐハ金子のゝびたる帳面を見せけるゞ。彦四郎大ひふよろこび。手柄くく其金子ハ其方の物ふいくし置べしと申しける。扨彼是とこ年もくらしもうちふ。彦四郎大病あり。吉兵衛ハ晝夜寢食をもはまて。看病息ちうも。療治手を尽もとゝいへ共。其印し見へゞこし。又信心

を志て佛神よいのるといへども。老病難治の症あて。此度ハ必死と見へたり。是ふよつて彦四郎も末期ふ及び。吉兵衛其外一家親類子供等を呼集め。申しけるやうハ。吉兵衛事ハ幼年よりつとめくゝ甚だよろし。此方より無理をいひくけ。無体ふ事もいさしたをども。少しも心ふうけびをあちゞ堪忍ありがさきとゝろをバ辛抱志て。よくつとめたり。其そうびと志て。今迄預け置たる家屋敷ハ勿論仕込物。有金等残らず吉兵衛ふ遣ハ。皆々左様ふ相心得て。吉兵衛と中よく暮し万事。吉兵衛ふ相談志て世の中を。鹽梅よく渡るべしと遺言志て。正念ふ命終せり。叔藤式等も福んどろふ中陰の佛事年回等も丁寧ふ。いとあこけるる。扨吉兵衛ハ器量ハ生人彦四郎ハ。又々抜群の英雄あり。夫より段々と身上をよくいさし。大金持とあり商賣を手廣くいさし。手代共多く使ひける。ある時よく奉公をせし。手代上州へ絹買出しふ。金三百両持せて遣しけるふ。道中ふて女郎を買。ぞくち抜志て三百両の金子を皆失ひたり。夫より直ふ欠落志て。行方志ぬ事ありふける。余の手代共申しける。外の者への見せしめの為あり。急度ちんぎして。紀明ぞ〻と申しけるを。吉兵衛申ぬやうハあの者ハ是まで

奉公中々よく〳〵つとめたり。是ふようて五百両ハ遣いきんと思ふ所ふ。三百両失ひて欠落せしハ残念千万あり。兼て思ひきんと思ふよりハ。二百両不足ありとて行衛を尋ね金貳百両持せて遣ハしける。とあり。外々の主人あらうよりハ。三百両の金子ハ申るべくして。然るふ吉兵衛ハ左様ふ不埒者ふ跡より貳百両持せ遣ハしたとへ。ありがたき心あり。残りの手代共是を見て。末頼母敷思ひ。夫より後〻一人も不埒なる者もなく。皆神妙ふ家業を出精ふて。段々ふ主人吉兵衛の金銀をふやし益く繁昌いたしける。伊勢屋とりふい五十三軒あり。

二百両を捨て跡々の手代共が心を引立しハ。誠ふ町人の英雄一騎當千の勇者あり。年久しくふて跡ハ絶たれ共。其出店ハ今ふ方々ふあり。世ふもありがたき人といふべし。是非義非道の主人を真実ふ。うやまひ。何やうの無理をいひふふとも。無理を仕ふふとも。夫ふハ少しもかまはじて。已ふハ唯家来の道を盡したる福分あり。又ありがたき堪忍をよく〳〵いたし。辛抱をつとめたる所の福分ふり。是ふよつて主人の仁不仁ふかまはずと。唯一向ふ忠義をつくし。主人を大事とつとめあべ。天より福徳をあたへ給ふ事眼前あり。たとひ主人ふ何やうの無理非道ありとも。

きりゝ鳳凰松ゝ鶴今時聖代泰平ゝ
治まりて戸ざゝぬ御代の圖



夫ゆへ少しもかまはずして。よく堪忍をいたし何所までも
よくあんぢうをして真実ふ忠義を尽すべし。一切の奉公人たる
者ハ。此吉兵衛のゆうふ心得て。つとめたらバ何ゆうの。無理
をいひふふ主人たりとも仕へ安うるべし。況や慈悲情け
ある。主人ふあいてハ。猶更仕へ安ゆる為し。何分ふも此吉
兵衛のゆうふ。心得てつとむべし。是を一切奉公人の手本と
すべし。辛抱堪忍ハ諸願成就の本也。福徳の沢山ふ来る
道あり。此吉兵衛ハ忠義一途ふつとめし故ふ。天の冥加ふ
叶ひ大身体をゆらひ。彌々益々繁昌して。出店の五十三
軒もあるゆうふあり〳〵へ。家来の道を尽したる所乃

福分あり。若又主人の仁不仁を見て。忠義をする人ハ主人の
仁ふくらべてもする。忠義あるべき筈ハ主従の道ふ立ずして。
忠義といひがたし。他人あ〳〵らいあり。是等の人ふ福
徳あし。主従の道あし。是ふよつて主人の仁不仁ふ
ぞくと。真實ふ忠義を尽すべし。末ハ大福長者とあつて。世の
中を安心ふくらすべし。うとがひあし。一切の奉公人たる者
此儀を篤とをして。厚く忠義を盡すべし

○武道初心集下ふ奉公をつとむる武士第一のたしなへて。主
君たるへいらずして無理非道を仰せらるゝ。いうゆうの御ふ
りふ預り候共恐を入て御意を美り迷惑至極の体を

致さるゝ。たとへ主人より其方あやまりあるにおいて
い。申〻開きを仕るべき仰せらるとも。直々申
訳あるべい御言葉をめへまと申して。主従の作法に違
ひ大ひなる無礼大罪なり。然りといへども武士道のさま
り共相成べきやうどの義あらば。夫ハ格別の子細あるべし。其
時を過て家老用人抔へ便りて。申開きの御取成頼こ入
等の事ハあるべ叶ざる義なり。是ハ自とも主君のお
こゝろもやうにあらば。其身の一分も相立候やうにおよろ
ちき御諧答へ申上べしい。夫ハ自て古き武士の事を書
ちるゝ申候。慶長年中福島左衛門大夫政則の家来ハ佃

又右衛門と申ス大剛の士あり。在陣の砌り夜中ハ政則の
陣中ハ不憚の騒動あるて。家中の者士残らも本陣へ
あつまる事あり。其翌朝ハ至り政則又右衛門ハ対して。其
方儀夜中さうどうの刻ハ鎗ハさやをかけあるく持出た
るハいかゞの事そと。御尋ねありけるに。又右衛門承り御
諚のあるもむき。御尤ハ候ハ脇ざし方より以の外。雨天ハ自
あまざやをかけ置候を其侭持出候。然るべさやを
かけあるく持出ハと御覧被ぜらるるハ御尤り奉
存候と。申上げるバ政則叓ハ聞へたりと御申有てあい
済けり。其後傍輩衆又右衛門ハ申けるハ夜前其許

俵ハ鎗のさやをたづさへて持出らるべしをいづるもよく見届け罷在ハ。幸ひ證人もあるべし。今朝御尋の節雨ざやをうけ置いとの御請ハ一圓心得がたしとたづねけるべ。又右衛門聞てあまざやの俵ハ各て方も御存じの通り油紙一重の事ハ此へだ。ぬき身の鎗も同前也。うそをあるもも大将の御目がね違ひとあるハ重き事あり。爰を以て右の通り御請ふ及びいと申けるべ。是を兼る諸人又右衛門が心入のそどかんどけるとあり。自今以後とても。主君の御側近く御奉公をつとむる武士ハ其心得ないく叶ふまじる事あり。初心の武士心得の為仍て件のごとしとあり此又右衛門がごとく心得てつふべき事本道也

○叔孟子齊の宣王ハ主従の道を説ふ事。又捕の家訓豫讓等の事ハ。主人の心得を申す事あり家来の道ふたつなきたる共人情ハ又かくのごときの事もあるべ一向ハ筋なき事とハ思ふべからず。主人の仁恵薄きるべ自然と忠義も薄くある事あり。又仁恵薄き人ハ其外ハもあ〳〵き事あつて忠義も思ふやうハ尽しがたき事をあり。是主人の使ひやうよつて。忠あるも不忠あるも事あるべ主人の使ひやうも大事あり。主人たる者ハ此

道理をよくきわめて家来を我子兄弟同前に思ふべし万事慈悲情けあつて道に當るやうに使ふべし

○又主人の恩惠使ひやうに上中下種々無量あり家来の忠義にも上中下種々無量あり一がいにひがごとし此主人に不実にきわめて末頼母しからぬと思ひ主人の仁惠ふくらに感じて奉公きわまる事もあり又主人もまた不実者にして大事の用も頼とかさし折もあらば。ひまを遣るべしと思ひて使ひ居るもあるべし。千差万別あり一がいに思ふべからず孔子已に見行可の仕へあり。際可の仕へあり。公養の仕へありと。孟子に見へたり。見行可の仕へとは。道の行ふべき兆しのある故に。仕へ奉ふ事あり。又際可の仕へとは。主君交るに礼を以て敬ひ奉ふ故に先留まりて仕へ奉ふ。又公養の仕へとは。主君より賢者を養ふたまはりのある故に仕へて居奉ふ。然れども道の行あるべきの時は去り奉ふ。孔子も事に臨んでかくのごとき仕へあり。いろんや其餘の者共へいろ〳〵様〳〵の仕へやうの筈ときわまるべし。又抱関撃柝の仕へあり。是は道路の関門を守り。柝木を打てまわる役也。是は忠義を尽し道理あるべんが為にあらず。貧乏故に妻子を養はんが為なり。奉公きわまる也。主人にも色々なり。家来にも色々なり。

より時ハ臨んで。人を使ひゆうあり。人ハ使ふもゆうあり。
勘へ置べし。然ども共家来の者ハ佃氏吉兵衛のゆうハ心得
て主人ハ仕へ奉るべし。主従の事ハ四書五経等の堅き教へ
なりうめてハ委敷事ハ為ども難し。主従の心得千差万別ハ
ども。教へも又千差万別あり。色々様々の訳ありて一朝一
夕の論ハあらじ。是ハ依て古今諸賢人の名言を以て勘へざ
ればよい所ハ為ども分らず。先ての本の始終をよく見
て。人を使ひゆう。人ハつうるも様のあらまし。を為べし。
人と為て人を使ひゆう。人ハ使ふもゆうを為ども家
も國も治りがたし。上下共ハ大入用。よく心得ふべきの分

一也。いづれも巻中の事をよく心得て。中道のよ
い所を通りゆふべし。人ハより時ハ随ひて大入用の事
あり見て考へゆふべし。
此外主君方ハ生身の神明ある事。又御供先の喧嘩口
論等ともなる時の心得。又道中船場川越御旅館乃
前後出火等有之時の心得。又主君をいさむるハ大事
の秘事口傳あり。いづれの家ハもよくある事あれば
臣下たる者ハよくあらまんをあくべうもこの事ハ
六編ハあるを見て考へゆふべし
主従心得草五編下終

弘化四未歳六月吉祥日
東都下谷金杉
安樂精舍真鏡著

主從心得草初編二冊　日用心法鈔初編三冊
同　二編二冊　同　二篇三冊
同　三編二冊　同　三篇三冊
同　四編二冊　同　四篇近刻
同　五編二冊　同
書林　下谷廣德寺前　和泉屋庄治郎

弘化四未歳正月吉祥日
東京下谷金杉
安樂精舍主述

書林　東京日本橋通壹丁目　須原屋茂兵衛